

## 物語ることへの抵抗 自閉症者の自伝を読む

川本玲子

### 一 自閉症への注目と物語的展開

一九四〇年代に心理学者レオ・カナリーによって自閉症が「発見」され、その印象的な命名をされてから半世紀以上が経ち、今日ではその症状や原因についても格段に解明が進んでいる。この特異な「発達障害」は、認知度の急激な高まりとともに、一つの社会現象さえ巻き起こしているように見える。アメリカでも日本でも、書店の棚には認知科学や児童発達学の専門家による難解な研究書や自閉症児向けの教材、そしてその親のための解説書やアドバイス集の類いがずらりと並ぶ。これに加えて、東西の先進国でまさに続々と出版されているのが、自閉症者の自伝・他伝である。家族との共著や、親による自閉症児の成長

の記録なども含めれば、今世紀に英語と日本語で出版されたものだけでも、ゆうに百冊を超える。比較的新しい著作をほんの一部挙げるなら、日本の泉流星『地球生まれの異星人』（二〇〇三）や藤家寛子『あの扉の向こうへ』（二〇〇五）、アメリカのジョン・エルダー・ロビンソンの *Look Me In the Eye* (2007)、オーストラリアのキャシユル・モアの *A Blessing and A Curse* (2007) などがあり、英語のものは次々に和訳が出版されている。二〇〇七年の米国疾病予防管理センターの調査によれば、自閉症者の出生率は百五十人に一人とされること（最近までは、千人に二、三人と言われていた）、またその大半が言語発達の遅れや欠陥を示し、生涯言葉が発しない人も多いことを考えると、これはかなり大きな数字ではないだろうか。実際、自伝や

研究書を多数著したドナ・ウィリアムズは、自閉症であること自体を一部で疑われてはえびるし、また母親ビュティとの共著という形で自伝 *There's a Boy in Here* (2002) を出版したジョン・バロンは、「で、あの本は本当は、誰が書いたんです？」(Barron 2002, 263) という悪意ある質問を受けている。つまり、自伝を書く自閉症者というのは、一種の名辞矛盾だと思われるふしさえある。

今や自閉症者の自伝のなかでも「古典」となった感のあるテンプル・グランディンの *Emergence* (1996)、『ドナ・ウィリアムズの自伝三部作である *Nobody Nowhere* (1992)、『*Somebody Somewhere* (1994) と *Like Color to the Blind* (1998)』さらに専門家による研究書以外の自閉症文献の草分け的存在となった、自閉症児の母クララ・パークの *The Siege* (1967) の続編 *Exiting Nirvana* (1992) などが出版されたのは、いずれも九〇年代である。アスベルガー症候群についての世間的認知度が高まったのもこの頃だが、それも自伝・他伝を通じてのアスベルガー者／高機能自閉症者たち自身の努力に負うところがあるだろう(1)。おそらくこの背後には、八〇年代から人文科学と自然科学の分野で同時に起こりつつあり、いわば両領域が歩み寄る契機にもなった、より大きな思想的流れがあった。いわゆる「物語論的展開 (narrative turn)」である。

心理学者ジェローム・ブルーナーは『*Acts of Meaning* (1990) と *Actual Minds, Possible Worlds* (1992)』において、人間の経験の構築および自己理解における物語的思考の重要性を説き、影響を与えた。科学研究を支える論理的思考とは異なり、物語は「真実」ではなく「本当らしさ」を追求するとブルーナーは言う。 *Acts of Meaning* によれば、社会科学の諸領域では、文学理論や物語認識についての新理論に影響されてか、七〇年代後半から八〇年代前半に、「語り手としての自己」という概念が登場した。さらに精神分析学者ロイ・シェイファーは、語り手としての自己は、その語りのうちに自己自体をも構築すると主張した。この「物語論的見解 (narrativist view)」(Bruner, 1990) によれば、人はすでに完成された自己について語るのではなく、ストーリーの集積として自己を生成する。また哲学者ダニエル・デネットは、人の経験の主体となる統一的自己とは、必要ではあるが実体のない神話であるとし、やはり「仮概念」であるところの物理学における重心になぞらえた「物語的重心 (narrative center of gravity)」という概念を用いて、物語こそが人間の自己意識の中核を成すと指摘した。このような思想は、人類学、教育学などの人文科学研究に波及するに留まらず、精神医学や発達心理学といった領域にも、それまで閉め出されていた人の生という要因を再び導き入れることを促し、医療現場

における「物語療法」の誕生にもつながった。こうして、物語と物語ることを対象とする超領域的な研究が本格的に始動したのである。

デネットがその率い手の一人である今日の「心の哲学」研究は、最先端の脳科学と密接な関係にあるが、後者の分野では、自己意識を支えるものとしての自伝的記憶が近年注目されてきた。英文学者ケイ・ヤングと脳科学者ジェフリー・L・セイバーの共同研究では、物語構築をつかさどる脳の領域がほぼ特定され、四種類の「ディスナラティブ」(「語れなくなる」障害)が提示されている。これはコルサコフ氏病など、主に記憶生成を妨げる脳障害に起因する障害で、新しい記憶を作る脳機能が壊れたために、自分が若者だと信じ続ける熟年者や、過去の人生を一切思い出せず、憑かれたように「作話」<sup>「ラフレレシヤ」</sup>を続ける者の症例が紹介されている(これらのエピソードを最初に紹介したのは、神経学者オリバー・サックスの *A Man Who Mistook His Wife for A Hat* (1970) である)。いずれの場合も、脳神経レベルでの物語化の能力が失われたために、自己が崩壊していると言える。ポストモダンイズムが示したテキストの非決定性や多様性は、そのまま私たちの自己というテキストとも通底していたのであり、いわゆる現実世界に錨を降ろすのに不可欠な、「本当らし」と「物語を紡ぐ能力が失われると、私たちの

自己統一性自体もまた失われることになる。

というわけで、九〇年代に台頭した自閉症の自伝というジャンルは、それまで研究の対象と方法論の両面ではっきりと分断されていた自然科学と人文科学の領域のちょうど中間に位置し、その意味で、「物語的展開」の気運に合流したように思われる。というのは、自閉症は「物語的自己」を考えるとき、ディスナラティブとは違った意味で、興味深い視点を提供するからだ。前述のように多くの自閉症者は言葉を発しないが、皮肉なことに、高度な言語能力を持つ高機能者はいずれも、これらの自己観や世界観の非物語的なあり方を説明している。ブルーナーやデネット、サックスが言うように、人の経験は物語的に構成される(つまり、人は事象を物語として経験する)ならば、自伝とは単なる文学の一形態ではなく、自己統一性の形成に不可欠な行為だということになる。そうすると、自伝のテキストは、すでに物語的に構成された経験を物語として書くという意味で、物語の二重構造を内包するはずだ。しかし自閉症者の自伝では、この構造が顕在化することで、いわば自己創出のからくりが逆に暴き出されることになる。

## 二 自閉症と反物語的発達

ここで、発達障害としての自閉症の定義を確認しておきたい。全米自閉症協会のウェブサイト (<http://www.autism-society.org>) によれば、自閉症は「典型的には生後三年の間に発症する複雑な発達障害で、脳の正常な機能に関わる神経障害であり、社会的交流やコミュニケーション能力の領域での発達に影響を及ぼす」ものである。原因については未知の部分も多いが、先天的な脳障害だとの見解が今では一般的だ。心理学者サイモン・バロン・コーエンは、アラン・レスリーが打ち出した「心の理論」(theory of mind) という概念を応用し、定型発達者に備わる「心の理論」を先天的に欠く自閉症者は、いわば「心に対して盲目」なのだという説を唱えている。心の理論とは、すなわち他者の立場に立って考える能力であり、自己の客観化と他者の内在化を基盤とするが、定型発達の子供において段階的に観察されるこれらの発達のプロセスが、自閉症は見られないという。その結果、自閉症者はごく幼い頃からすでに周囲から浮き上がりがちである。周りの人間に子供らしい関心を持たず、ただ自分の気に入った物や遊びに一人で没頭し、母親の愛情にも反応を示さない(むしろ抱擁を拒んだりする)場合もある。こうして傍目には文字通り「自閉している」としか見

えない子供の意識には、世界はどのように映っているのだろうか。

これについては、自閉症関連の書籍のタイトルが示唆に富む上に挙げた藤家の『あの扉の向こうへ』やグラウンディングの *Emergence*、ロン親子の *There's a Boy in Here: Emerging from the Bonds of Autism* など、自閉症という名のイメージに呼応する、脱却あるいは出現を示すものは分かりやすいが、さらに一風変わった比喻を用いたものも多い。それも中身を読めば、ただ奇を衒ったのではなくて、いずれも自閉症者やその近親者の体験や心情を切実に反映していることが分かる。最も頻出する比喻は、前出の泉流星の『地球生まれの異星人』が好例だが、「異星人」のそれである。サックスのベストセラー *An Anthropologist on Mars* (1995) は、種々の脳障害によって自己観や世界観に大きな変化を被った人々の姿を描く随筆風の症例集だが、同書の題名は、最後のエピソードに登場するグラウンディングが自らを「火星の人類学者」に喩えたことにちなんでいる。また、スウェーデンのグニラ・ガーランドの *A Real Person* (1997) は、外見は普通でも本当は「偽物の人間」であるという著者の自意識を表現している。次に、カレン・ユンカーの *Child in the Glass Ball* (1994)、ウェンデル・ローソンの *Life Behind Glass* (2000) に見られるような、ガラスなどの

「透明な壁」による遮断のイメージもある。これらの喩えは、共に暮らしながらも互いを理解できない定型発達と自閉症者の困惑と葛藤をよく表している。そしてパークの *The Siege* を貫くメタファーは、かれらが直面する、共存を強いられた異文化社会同士がしばしば選択せざるを得ない運命、つまり「戦争」のそれである。

自閉症者の葛藤は、自らについて書くという行為のなかで、さまざまな形で表れる。それは、かれらと周囲の世界との戦いであり、自閉症そのものとの戦いであり、何より意味、言語、そして物語との戦いである。自閉症児とその家族との生活は、異なる秩序や価値体系を持つ二つの世界の激突に他ならない。以下は、パークが幼い自閉症の娘「エリー」に対して「宣戦布告」を覚悟するくだりである。

私たちのあいだに存在しながら、「エリー」は自分自身を別の場所に置いていた。彼女に対してなんの要求もなされないかぎり、彼女は幸せだった。もし微笑みや笑い声が幸せを示すのなら、彼女は透明な壁に取り囲まれて幸せだった。独りぼっちの要塞のなかに暮らし、人を惹きつけ、自立していて、完全に、確かだった。でも、私たちは彼女をそこに置き去りにするわけには行かなかった。侵害し、攻撃し、侵略せねば

ならなかった。彼女がその中で不幸だったからではないし、実際、彼女は不幸ではなかった。むしろ、彼女が見つけた完璧な均衡が、成長の可能性を拒むものだったからである。

(Park 12)<sup>(2)</sup>

一方、自閉症児にとっては、自分に対してこの成長と変化への期待を抱く人間こそが、自分の平和を脅かす最大の「敵」となる。(その動機が敵意や悪意ではなく愛情であっても、子供がそれに気づくのは、ずっと後のことである。) 自閉症においては、(ウィリアムズの区分を借りるなら)「私の世界」(my world) への愛着と、そこに侵入しようとする理解不能な「世界」(the world) への嫌悪と恐怖が、悪循環を生んでいるふしがある。「世界」が「私の世界」のあり方や意味体系に一切理解や敬意を示さず、いわば無条件降伏を迫ることが、自閉症者の困惑と怒り、絶望を導き、よりいっそう内的世界に救いを求める原因を作るのである。しかし、「世界」に対する自閉症者の戦いは——一部の者がそうするように、「世界」を生涯、完全に遮断するという選択をしないかぎり——敗北の運命にある。というのも、「世界」の側では、(家族をのぞいては)彼らと戦っているという意識すらないのだから。彼らが救われるには、自閉症の診断というエピソードを経て、「世界」に対する赦

しの境地に至ること、この戦いから離脱するしかない。九〇年代に出版された自閉症者の自伝の多くは、内的世界に逃避した幼年期に始まり、社会への適応に苦しむ十代、二十代を経て、ようやく診断を受け、そこから自己理解と社会との「和解」へ至るといふ経緯を辿っている。

自閉症者の伝記は、ほとんどあらゆる伝記がそうであるように、幼児期の回想から始まるが、その内容はいづれも、その後の長く苦難に満ちた道のりの不穏な予兆をはらんでいる。たとえば次は Stage の冒頭の文である。

一つのイメージから始めよう。ちいさな、金色の髪をした子供が、床のある一点の周りを、謎めいた、無我夢中な様子で、嬉しそうにハイハイして回っている。その子は微笑み、声を出して笑っているけれど、顔を上げはしない。自分を喜ばせている対象に私たちの注意を引こうともしない。彼女には私たちがまったく見えていない。彼女とその一点だけがそこにあるのであり、もう生後十八ヶ月になるのに、その年の赤ん坊らしく、触ったり、なめたり、指差したり、押ししたり、探検したりという何を一つしない。歩くことも、階段をよじ登ることも、物に手を伸ばそうとして立ち上がることもしない。彼女はどんな物も欲しがらない。その代わり、彼女の

点の周りを回るのである。(Part 3)

パークが「妖精の取り替え子」と呼ぶエリーは、明らかに自分だけの世界に浸りきっており、周囲の現象は、母親でさえもただの「背景」に過ぎない。また、ショーン・バロンと母ジュディの交互の語りで構成される『There's a Boy in Here』の冒頭では、積み木を与えられた一才のショーンが、それを組み立てて遊ぶ代わりに、机の上に並べては払い落とすということを延々と繰り返すさまがジュディの視点で描写される。いずれの場合も、まだほんの幼い子どもが、母親にとって完全に理解不能で、それゆえに不気味な他者として衝撃的に表象されている。他方、グランディンの自伝の冒頭では、些細な（と周囲には思える）刺激にも過敏に反応し、パニックを起こして暴れる「破壊的な子供」の心理が内側から説明される。著者は並み外れて鋭敏な感覚を持つゆえに、常にざわざわと騒がしく、めまぐるしく変化する人の世界と、そこから押し寄せる感覚情報の嵐を恐れ、内的な世界に埋没することで逃避するようになったのである。

専門家さえもが自閉症者とその家族、特に母親への偏見に満ちていた時代にあって、独自の教育法でエリーに働きかけ続けたパークの愛情と献身は、多くの研究者を啓発してさえいる。

しかし同時に、聡明なパークは、親子でありながら二人が同じ言語を共有していないことを十分に意識している。「あなたも」という言葉が頻出する彼女の文章には、エリーを「こちら側」に引き入れようとする家族の努力が、実は単なる欺瞞や自己満足ではないかという懐疑が窺われる。というのも、エリーを日々観察するうち、パークは娘のランダムで唐突に見える数々の行動の裏に、ある一つの世界観——「普通の」人間のそれとは異なるが、確かな体系をもった世界——があることに気づく。グランディン、ガーランド、パロン、ウィリアムズ、泉の自伝を読むと、彼らがそれを共有していること、そして彼らが性差や国境を越えた同朋どうしであることが分かる。(ただし、彼らがその共同体を発見するには、長い年月を要したのである)。

まず、自閉症者は、予定の変更や引っ越しなど、親しんだ時間的・空間的パターンを乱されるのを極端に嫌うことが端的に示すように、変化や予測不可能性を恐れる。その一方で、秩序と一貫性を愛し、複雑な構造を理解することに情熱を燃やし、子供時代には地図やパズルに執着したり、それらに関して非凡な記憶力と認識能力を発揮する者も多い。(ジグソーパズルを絵のない側を表にして作成したり、電車やバスの路線図を丸暗記することが得意であったりする。) また高機能者には、成長

して機械や建築の設計を生業にする者もいる。自動車修理工場を経営するロビンソンや家畜施設的设计士であるグランディンが、その好例だろう。また文系では、ウィリアムズや泉のように言語体系に関心を持ち、複数の外国語を習得するだけでなく、言語学の学位を取得するケースさえある。ただし彼女たちも、他者と言葉を交わすことは依然として不得手で、人の発する音声の意味ある言葉として認識できない「意味盲」の状態に陥ることが今でもあるという。つまり、自閉症者はみな、状況に依存するパロールには混乱するが、ラングの整然とした構造と規則ならば、高機能者には習得可能だということだろう。実際、泉は言語学の勉強をして初めて、自分が「ほとんど書き言葉そのまま話している」(泉、一一三)ことに気づいたと述懐している。彼女はまた関西人でありながらずっと標準語を話していたが、これも話し言葉である方言よりも、書き言葉に兼用できる標準語の方が分かりやすいからだろう。

このように、構造や体系の概念は自閉症者にとって重要な意味を持ち、その世界観を支えている。パークはエリーを「生まれつきの構造主義者」(Park, 297)と評しているが、自閉症的価値観では、構造を超越する意味はなく、構造自体が意味を持つものかもしれない。それはまさに構造主義分析が文学作品に見いだしたのと同じ、共時的で普遍的な、コンテクストから独

立した意味なのだろう。ガーランドは、自分が子供の頃にジグソーパズルに熱中したのは、「パズルというものを、人間の「やること」というよりも、何か「起きること」のように考えていた」からで、「パズルには、始まりと終わりがある。そして私は、何かが終わった状態というのが好きだった。終わったもの、完成したものは、満足感を与えてくれる」と述べている（ガーランド、ニキ・リンコ訳 七四）。自分の行為さえも受動的に体験されたというこの内省は、おそらく自閉症の核心に迫っているだろう。定型発達の世界では人間のもっとも重要な特性であるとされる、行為を志向する意思というものが、自閉症では絶対的な価値を付与されていない。だからこそ、彼らには自分たちにさまざまに働きかけてくる他者の意思が、皆目理解できないのだろう。言い換えれば、やはり構造主義者と同様、個々のテキストに個別の意味が内在するという考えを持たない。つまり、彼らに自然発生する問いは、全体の構造や部分の連結方法を対象とする「いかに」であって、意思や意図を対象とする「なぜ」ではないということではないか。

自閉症者が積極的に人の目を見ないのは、他者と意思を伝え合うという発想がないからだし、また人と目を合わせることを強要されたときに恐怖を感じるの、自らを対象とする他者の意思の存在を認識すること自体が、不快かつ不当な侵入として

体験されるからだろう。しかし、この他者の視線の回避、あるいはその認識の不在は、自閉症者の自己観に大きな影響を与える。村上靖彦の『自閉症の現象学』によれば、定型発達の子供は、他者の視線のベクトルを通じて自らの身体の位置を知ること、身体空間の意識を確立し、運動感覚を発達させる。他方の他者の視線に敏感でない自閉症児は統合された身体感覚を獲得しづらいため、運動機能にも弊害が及ぶことがある。子供時代のガーランドは道路を横断するタイミングがつかめず、また大人になっても「体が勝手に動く」ことはなく、すべての動作を意識的に行っているという。自分の意思でさえも、直感される自己とは異質なものとして体験されるということだろう。おそらく定型発達の子供は、外部からの視線を意識し、その視線をたどることで、やがて他者の視点に立つに至るのであり、そうして相手の心身に「共鳴」し、他者の心と身体のある方を模倣すること——いわば、心身のミメシス——を習得するのだから。

周囲の大人や子供の行動から積極的に学ばないエラーについて、母親クララ・パークはこう嘆いている。

「模倣精神は、子供の頃から人間に備わっている。人間が動物と異なるのは、人間がもっとも模倣的であり、人間の最初

の学習は模倣を通じて起こることに依つてである。前述のように、すべての人間は模倣に喜びを見いだす。」アリストテレスの発言のなかで、これほど正しく、これほど自明なものがあるだろうか？ でも、私の子は模倣をしないのだった。

(Park, 100)

人間的な時間、アリストテレスの言う始まり、真ん中、終わりを持つ時間は、目的意識に貫かれている。たとえ意思者が人間であっても、擬人化された運命であっても同じことだが、そこには意思の達成というゴールが設定され、それが行為を促すことで、物語に形を与えるものとしての時間、ポール・リクルのいう「物語的時間」が流れ始める。しかし、世界に意思を付与せず、ゆえに目的意識も持たない自閉症者には、そのような時間感覚はない。実際、エリーはカレンダーのような空間的表象は把握する一方、過去や未来の概念とは無縁であり、それゆえ現在の概念も持たない。行為を志向する意思が不在なので、現在の視点から検証あるいは反省されるべき過去や、目的意識が生み出す未来の感覚も不在なのである。(だから、エリーは遊びや勉強において、一つの作業を別のより複雑な作業に発展させたり、目標を立てたりはしない。ただ同じ作業が反復され、あるとき放棄されるのみである。) 翻つて、過去に対する未来

として現在を捉えることもないから、単なるフラッシュバックではない、意志的な記憶の回復として積極的に思い出すという心的活動も見られにくいのである。

パークはエリーについて、目的意識の欠如こそが想像力の欠如、現前しないものを認知する力の欠如を生んでいると観察している。確かに自閉症においては、現前しているものだけが認識され、見えないもの、不在のものは勘定に入りにくい。(「そこに客観的にないものについて、「エリー」がよくも悪くも感情を持つところは、私は見たことがない」(Park, 240))とパークは言う。) 人間生活の根幹を成す、不可視または不在のもの、の想定と想像は、物語を作る能力と直結する。もし人が仮定法的思考を行わなければ、人生について考えることもないだろう。過去に選択しなかった行動が可能にしたかもしれない現在や、これから選択する行動から導かれるかもしれない未来のイメージこそが、「人生」を作るのだから。

自閉症者の時間感覚について、村上は、かれらには「自分の過去を秩序づけて語ることが困難」であり、「知覚とフラッシュバックを質的に分ける基準がないのかもしれない」としている(村上、六五)。だとすれば、人生という、時系列的な表象と不可分と思えるものも、かれらにはむしろ一枚の絵のように捉えられるのではないか。それは定型発達を考える人生像とは

まったく異なる、不在も裏側もない、仮定法的思考の介在しない人生像である。そこにはジグソーパズルのピースのように、いくつもの類似した、しかし異なるエピソードがちりばめられている。ガーランド、ウィリアムズ、そして泉の自伝はいずれも、傷つき混乱しながらも、人から人、職から職、国から国へと転々とし、放浪する彼女たちの姿を描くが、それは何らかの目的地に到達したいというよりも、世界を、そして自らの人生を、一枚の大きな図として把握しようとする心理を示しているように思える。彼女たちの語りが、自身の生涯を時系列的に追いつながらぬ、時間の流れを感じさせないのは、それが目指すところが、変化と成長による通時的な「完成」の概念ではなく、いわば徐々にその全体を現す絵画のような、共時的なそれとしてイメージされるからではないか。

### 三 自閉症の世界と「物語脳」

このように、自閉症の世界を支える基本概念群は、定型発達の世界とは根本的に異なる。自閉症者はしばしば「冷たい」「自己中心的だ」「好奇心がない」「怠慢だ」といったそしりを受け、彼らを傷つけ、困惑させるこれらの形容はいずれも、「世界」のものさしで、まったく別の意味体系を持つ人々を測

ることの矛盾から来る誤読に他ならない。傍目には、自閉症児は完全に意味の欠落した、混沌として無味乾燥な内的世界を抱えているように感じられることが多い。しかし、成人した彼女の文章を読めば、それは誤った推測であることがわかる。ウィリアムズは、幼児期の彼女の意識に映る世界は「ある種の音、手触り、模様、色彩」から成る「個人的で内密な天国のようなもの」(Williams 1996: 39)であったと回想する。また、子供らしい遊びに無関心なエリーも、色と幾何学図形には並々ならぬ執着を見せ、「抽象的な、意味のない形が、彼女には本質的な重要性を持っているようだった」(Park 58)という。「彼女はあたりかも、現実の世界と純粹な形の世界は別々のものだと分かっているかのように思われた——そして、これを分かっている、形の世界の方を好んでいたかのように」(Park 240)。

自閉症児は色彩や手触り、音に敏感なだけでなく、それを驚くほどきめ細かく分類し、それによって自分だけの、自分だけの言語体系を編み出している。幼児期のガーランドは、人の顔や家の間取りといった情報はまったく処理できなかったが(両親の顔すらかろうじて認識していた)、やはり混沌に満ちた「世界」を理解するための、自分なりの表象体系を作っていた。「私の中には、一個の色彩のシステムがある。〔……〕私の中では、すべてが色彩に変換された。人間たち、言葉、感覚、そし

て場の雰囲気。それぞれに固有の色があった」(ガーランド、二〇)<sup>30</sup>。それはワイトケンシュタインの「私的言語」にも似て、他者に伝えることが最初から想定されていないし、また実際に伝えることはできない。

ウィリアムズは、周囲の現象(物の感触、模様、音、色など)が自分の一部となる、あるいは逆に自分がその一部となる感覚、そして世界と自分が融合する感覚に何度も言及している。特に彼女を陶醉させるのは、床や壁紙の模様であれ、音楽であれ、一つのモチーフの規則的の反復である。そのようなとき、彼女は「ただ在る」(simply be)という境地に達するが、*Autism and Sensing*において、これはこのうえなく快い、豊かな体験として描写され、恣意的な言語的意味の閉ざされた体系としての「世界」と対比されている。村上は前者を「事物との一体化」と呼び、そのような状態にある自閉症者の意識は「感覚的印象に共鳴する世界」にあるとする。

これは自己感のない状態で単純なパターンだけが意識を占めている状態である。「……」多くの高機能自閉症を持つ人が、この体験を美しいものと表現している。感性的印象が運動感覚や視線触発と結びつくことなく、そして言語とも結びつくことなく意味を生成するとき、それは美と名づけられるのだ

ろう。(村上、九)

ただし、かれらがこのような意識状態を体験するとき、そこには美という言葉も概念も本当は介在していないのだろう。パークによれば、エリーは鋭敏な色彩感覚を持ちながら、「きれいな」「すてきな」あるいは「美しい」とも、また逆に「醜い」とも言わない(Park 212)。あるいは、そのような語彙を用いたとしても、それはあくまで、かれらのビジョンを人の言語へと置き換えた「訳語」に過ぎないだろう。色や音のパターンが形作る「意味」は、非自閉症者の考える「意味」とは異なっているに違いない。それは前言語的世界の意味体系なのである。実際、グランディンは自分にとって言語は「第二言語」に過ぎないと言いつつおり、パークもまた、エリーは「外国語」として英語を学んだ」のであり、「いまでも異邦人としてそれを話している」と言う(Park 292)。

心理学者ニコラス・ハンフリーは、『喪失と獲得』において、進化して新たな能力を得た生物は代わりに古い能力を失うとし、その例として自閉症のサヴァン症候群に触れている。確かに、しばしば動物のそれに比較される自閉症の鋭い五感や、それに連動する感覚記憶は、定型発達においては、言語的意味の相互伝達と、自伝的記憶やエピソード記憶といった、物語として蓄

積可能な記憶に置き換えられているようである。つまり定型発達には、身体感覚が鈍い分、世界を織りなす膨大で雑多な情報を重要そうなものから優先的に読み解き、処理するための新たな方法を身につけている。それは物事の因果関係を読み取る、いや読み込む能力である。これは、一方では「あちらから車が走ってくる」という情報から「このままでは轢かれる」という帰結を導くための、物理的因果律についての理解と、他方では、「この人は今、怒っているようだ」という情報から、「話しかけても良いことがないだろう」と結論づける心の理論に依拠している。自閉症者は、いずれの種類の因果的思考もさほど得意ではない（エリー、ション、ガーランドはいずれも、子供の頃に車の危険性を認識せず、事故に遭いかけている）。

このことから結論されるのは、定型発達には想起される記憶を物語的に解釈するばかりか、現在の体験さえも、ただちに（いざれ語られるべき）物語として処理しているということである。野家啓一は『物語の哲学』において、大森荘蔵の過去論を援用しながら、「語り」という行為について次のように述べている。

経験語ることは体験を正確に再生あるいは再現することではない。それはありのままの描写や記述ではなく、「解釈学的変形」ないしは「解釈学的再構成」の操作なのである。そ

して、体験を経験へと解釈学的に変形し、再構成する言語装置こそが、われわれの主題である物語行為にほかならない。

（野家、一一五）

しかし、解釈学的変形あるいは再構成は、どこ時点で起こるのだろうか。実は、定型発達に知覚される情報の多くは、後の時点で想起を待たず、知覚の瞬間に解釈のフィルターを通すのではないか。ガーランドは「私の視覚は、大切なものを自動的により分けてくれるということがなかった。何もかも無差別に、鮮明かつ克明に見えていた」（ガーランド、七〇）と言うが、定型発達の場合、「大切なもの」は、自分への関わり具合によって峻別される。この過程を段階に分割するならば、まず世界の雑多な運動とその混沌とした印象のなかから、ある感覚印象の束が「出来事」という単位として抽出される。それは出来事としての恣意的な重要性、また他の出来事との関連性に応じて区分けされつつ、記憶に保存される。この際、この記憶はすでに語りに変換される準備を施されており、そこにはすでに物語の種が植えられている。

このことは、自閉症者との比較によってより明らかになる。まず自閉症者のほとんどは、写真的記憶能力の有無にかかわらず、「体験」が起きた時点で「解釈」が自動的に作動していな

い(だから車に轢かれそうにもなる)。また、一組の感覚情報  
を「出来事」として括るその基準も、定型発達とはかなり異なる  
だろう<sup>③</sup>。一方、定型発達の脳は、自己を語り、その語りの  
過程で自己を確立するに先立って、あらゆる体験を物語として  
紡ぎ上げて行こうとする衝動を抱えている。(ただし、物語化  
を拒むような体験は、捨象されるか、抑圧される。)意味への  
渴望に裏づけられたその衝動は、他者理解を可能にする代わり  
に、本質的に自己中心的な世界の解釈を生む。次のグランディ  
ンの省察は、この二つの世界観の決定的な違いを端的に示して  
いる。

今日にいたってさえも、私の思考は傍観者の視点にもとづ  
いている。これが変だとは気づいていなかった十二年前、あ  
る心理テストを受けるまでは。クラシック音楽を聴かされ、  
心に鮮明なイメージが浮かんだのだが、私の心に浮かんだイ  
メージは、他の人たちのそれと似てはいたけれど、私の場合  
は常に傍観者の立場から想像したイメージだったのに、ほと  
んどの人たちは、想像したイメージの中に、自分たち自身が  
参加していたのだ。たとえばある曲の一節は輝く海に浮かん  
だ船のイメージを喚起したが、私の見たイメージが絵はがき  
のようだったのに対し、他のほとんどの人たちは、そのボー

トに乗っている自分を想像していたのだ。(Grandin 2006b,  
153)

いふなれば、定型発達の脳は、「物語脳」なのである。自ら  
を主人公とする物語を書き、その中で自己を正当化するという、  
堂々巡りの「自作自演」のプロセスが、定型発達の生きる人生  
だとさえ言えないだろうか。

#### 四 物語ることの痛み——自閉症の自分語り

では、世界と自己に対する物語化の衝動を抱えていない自閉  
症者にとって、自伝行為とはどのような意味を持つのだろうか。  
自分史の生成を支える記憶と時間観について、村上はこのよう  
に言っている。

自分史の生成、自分の生をどのように意味づけ、一貫させる  
かという営みは、「意味」産出の一種である。感性的印象の  
移ろいとは異なる次元の組織化をする時間が浸透しているの  
である。(村上、六七)

このような「意味」産出への欲望自体が自閉症に欠けている

ことは、すでに述べたとおりである。ゆえに、もし定型発達の考える自己が、デネットが言うようにただの幻であり、物語的に統一性を装われているならば、自閉症者の自伝では、そこにある亀裂が顕在化するのではないかと推測される。Acts of Meaning の「自伝と自己」の章で、ブルーナーは、「自伝といふものには、何か奇妙なところがある」と言う。

それは今、ここにいる一人の語り手によって語られる、そのとき、その場所に存在した、その語り手の名を持つ主人公についての叙述であり、その物語は、主人公が語り手と融合する現在の時点で終わる。「……」語り手としての自己は、語るだけではなく、正当化もするのである。そして主人公としての自己は常に、「いわば未来を指差している。」(Bruner 1990, 121)

自伝という物語形式は、主人公である著者が語り手である著者(未来の自分)を志向するという前向きな目線と、また語り手である著者が主人公である著者(過去の自分)の体験を再解釈し、今の自分の物語に組み入れるという後ろ向きの目線とを内包する。しかし、自閉症者の語り登場する「私」は、現在の語り手を指向してはいない。たとえばガーランドが用いる

「その時の私には、まだ理解できなかったが」といった言い回しも、語り手の「私」と過去の「私」とのあいだの距離やずれを埋めはしない。過去の自分を文章的に理解したいという、自閉症におこては決して自然ではない欲求から産出される語り手の言葉には、迷いと戸惑いを感じられる。それはまさに、言語を得て、言語を通じて仮の統一性を得た「私」と、感覚的印象と溶け合う、前言語的世界の一部としての、心身の輪郭さえおぼつかない(私)との避けがたい乖離なのだろう。ウィリアムズらの文章を彩る、過去の自分が絶対的な他者となりつつあることの、その不安と苦痛は、物語化の必然的な帰結であり、どんな人間をも心底では苛んでいるはずなのである。

自閉症者の回想記には、突出したエピソードというものも見られない。むしろトラウマになるほど辛い体験や、印象的な体験がないわけではなく、むしろ読者から見れば、彼らの人生は、そのような体験の連続であるように思える。だが、それはその後の体験に対する反応や考え方を変えようという形で痕跡を残すのみで、本人のなかで思い出として突出はしない。彼らには、我々が通常考える意味での思い出、感情の愛玩物としての思い出はないし、愛や憎しみという名の固執や傷ついたプライドに強く彩られた逸話も、またそれに対する取り繕いや言い訳もない。内的世界についての説明はあっても、自己正当化はない。

過去は再読されるのではなく、初めて解釈を試みられるのである(しかもその解釈は、感情に左右されず、あくまで論理的である(というより、感情的な解釈の仕方が分からないので、論理に頼るしかない)。つまりかれらの語りは、他者の読みを意識しない、いわば純粹なモノログの形をとっていて、時には虚空で語っているような印象さえも受ける。

ただし、かれらの自伝に共通するクライマックスに、自閉症の診断がある。自分が何十年ものあいだ虐げられ、差別され、疎外されてきた理由が「発達障害」であるという事実は衝撃であり、またそれが引き起こす心情は複雑である。ガーランドは「それは、悲嘆でもあり、同時に、これまで欠けていた部分を埋め合わせてくれるものでもあった。救いでもあり、同時に痛みでもあった」(ガーランド、二六三)と描写している。「自閉症スペクトラム」という用語は、彼らに一つの明確な輪郭を与え、その存在を認知すると同時に、それまで彼らが自分の個性だと思っていたものを奪いもする。そもそも主体意識の弱い自閉症者において、この分裂は、アイデンティティ・クライシスに最も近い体験となるだろう。彼らがこの診断を通じて「障害者」の肩書きを得、その結果初めて「世界」の市民としての自意識を持つのは皮肉なことである。しかし、そのことが、これまでどうしても分からなかったことも今なら理解できそうだ

という期待を彼らに抱かせ、その手段として自伝を著す決意をさせる。

ガーランドは、「私は自分のことを書き記し、それによって自分自身を治療していった」(ガーランド、二六〇)と述べているが、生まれて初めて自らを物語ることは、「世界」との終戦を望むジュスチャーとなり、また自分を疎外した「世界」と、「世界」を疎外した自分への赦しの気持ちを生む。しかし、戦う理由を失った自閉症者は、もはや「私の世界」に閉じこめることを正当化できず、結果として二つの世界のあいだで引き裂かれることになる。その葛藤の激しさの描写において、ウィリアムズの *Somebody Somewhere* ほど切実で読む者の胸を打つものはないだろう。二十六歳にして初めて自分が自閉症ではないかと気づいた彼女は、「自分の人生を一貫して見ることで、自分の人生が自分のものであったということを確かめるため」(Williams 1992, 188) に書いた文章を、精神科医のところに持ち込むが、用が済めば焼かれるはずのこの原稿が専門家に絶賛される(同時に、彼女は正式に自閉症の診断を受ける)。かくして、「一種の墓碑」であり、「私の親友となり、また私の最大の敵」ともなったこの本は、後に *Nobody Nowhere* として出版され、続編 *Somebody Somewhere* は、その後の彼女の軌跡を追う (Williams 1994, 3)。

「私の世界」がその原稿のページに包まれていたのであり、それを外にさらすことは私の魂を自ら強姦するようなものだったけれど、それが出版された後には、私は「私の世界」の一部だけではなく、すべてを手放さなければいけないこととは分かっていた。〔……〕「私の世界」を拒絶することは、自分の手足を麻酔なしで切断するようなものだったが、しかしそれはなされねばならなかった。(Williams 1994.)

4)

こうして「私の世界」と惜別することになったウィリアムズは、カウンセラーや親切な借家の家主夫婦との交流を通じて、次第に「世界」のルールを学んで行くうち、進歩する喜びと共に、挫折と幻滅をも経験する。何よりの驚きは、事物には心が無いという発見である。それまで彼女は、算笥や絨毯といった無機物も、自分と同じように心や感覚を持っていると信じて疑わずにいたのだ。

木の葉は本当に踊っていたわけではなく、絵は壁の釘から飛び降りず、家具は私の周りに佇んでいたわけではなかった。

「世界」の奴め。それは空っぽの、醜い場所だった。なんて

こと、と私は思った、彼らは、自分たちのしたことが分かっているのかしら？ 私は彼らを信用したのに。彼らは私に与えるものなんか何もなかったのに、私は彼らを信用してしまっていた。私は自分の秘密の戦いを、そしてその秘密に守られていた「私の世界」の安全を諦めた。その代わりに私は、空っぽの真空中に投げ出されるはめになったのだ。(Williams 1994.)

71)

ウィリアムズがこの深い孤独感を人間との交流で埋められるようになるには、長い時間を要する。他人の目を見ること、手に触れること、抱擁すること、感情をさらけ出すことは、すさまじい恐怖感を引き起こすもので、それらの「技術」はすべて、失敗を重ねつつ、少しずつ習得される。実際の他者の存在には圧倒されてしまう彼女は、鏡のなかの自分と目を見つめあい、手を合わせることで、孤独を癒し、他者と接触する感覚を知ろうとする。心身のミメシスを人工的に習得するために、おそらく無意識に、まずは自己という他者を模倣することから学ぼうとするのである。

自閉症の診断を受ける直前、絶望のどん底にいたガーランドは「こんなに長い間、だまされて、努力を続けてきたと思うと、恥ずかしかった。本物の人間になりたいなどという、馬鹿馬鹿

しい夢にすがって来た自分が、恥ずかしかった」(ガーランド、二五五)と感じる。ウィリアムズもガーランドも、「世界」が彼らに求め続けた主体性を獲得すべく、もろく繊細な「私の世界」を守る武器を捨て、ガラスの壁を乗り越えるための、想像を絶する努力を経て、このような心境に至る。それを読んで、非自閉症者は思わずこう自己弁護したくなる——でも、我々は現にあなた方にこうして共感できるではないか。物語的想像力があるからこそ、自閉症者という他者の立場にさえ立てるではないか、と。しかし自閉症者の自伝は、その「我々」が信じて疑わない、共感することの美しさや尊さの裏にある自己欺瞞や自己中心主義、身勝手な押しつけがましさを所有欲を見据えることを、読者に要求する。幼少期のガーランドは、母親が自分に何かを求めていることにも、またそれが愛情であったことにも気づかず、ただ「母は私から大切な何かを取りたがっている」(ガーランド、二二)と感じたという。ガーランドの率直な反応は、あまりに予想外であるために、読者の思考の枠組を強く揺さぶる。

人間というものは、他人の愛情を手にしたがるものらしい。無理やりにも、外にひっぱり出そうとするものらしい……。私には信じがたい発想だった。人々がお互いに相手の内蔵を

ひき出したがるというのと同じくらい、信じがたい発想だった。私は、母が自分の中に侵入しているように思った。(ガーランド、二二)

物語脳を持つ人間は誰しも、期待や欲望によって互いを規定し、縛りつけ、引き裂く。そして、無数の視線を内在化することで分裂と断片化を起こした自己に、新たな意味解釈を与え、物語的に修復するというプロセスを繰り返す運命にあるのだから。

「自分の不安やエゴイズムや身勝手によって盲目にされている人たち」(Williams 1992, 164)の、裏切りと背中合わせの愛情などいらないと言われて、私たちに返す言葉はあるだろうか。実際、「世界」で成功した自閉症者たちにとってさえ、その住民たちは、ガリバーが見たヤフーにむしろ近いのかもしれない。事実、旅を終えたガリバーが家族をも避けて馬小屋で余生を暮らしたように、グランディンは動物と、ロビンソンは機械と、そして詩人であり、画家であるウィリアムズは木々や風と過ごすことで、狂乱の群れから離れての心の平穏を得ている。大切に思う家族や友人がいても、その人たちの帰属する場所は、彼らのふるさとはないのだろうか。

人は、意味と言語を自分と共有しない他者によって書かれた

自伝、物語に反抗する物語を、理解できるだろうか。読み手は

結局、そこに自らの解釈を押しつけ、そこに鏡像のように映る自らの姿を確認して満足するだけではなからうか。事実、我々が自閉症者の自伝を読むとき、心を閉ざした人間が、周囲の愛情と理解に満ちた働きかけによって目覚めるといふ救済の物語を、そこに見出したという誘惑に駆られる。そこにはすでに、期待とそれに対する誠意ある対応や、成長という名の変化という、「世界」の側からの強引な要請が入り込み、自閉症者自身

がそれによって生きるところの意味体系を見えなくする。*Siege* のエピソードにおけるパークの言葉には、自閉症者の世界を垣間見たことで、物語ることへの衝動と、それに対する拭いがたい不信と倦怠の思いを同時に抱えつつも、物語らないという選択は自分にはないことを自覚した人間の、一種の敗北感が感じられる。私たちは、物語という形をもってしか、生に意

味を与えられないのだ。

言葉は経験を整理し、一冊の本はその経験に終わりを与えるかのように見える——始まり、真ん中、終わり。一つの章、一つの段落、一つの文、一つの語が最後のそれとして提示され、まさにその事実によって、経験は形を得る。本物の人生の物語は終わらない。少なくとも、あの外から押しつけられる終末、つまり主人公の——あるいは語り手の——死によって以外は。私たちは単に、語るのをやめるのみだ。もし私たちが、物語のうちの、すでに生きられた部分になんとか意味を見い出したなら、私たちはそれを声にする。その意味が物語に形を与え、それを使えるようにするために、そして結末に到達させられるように。でも物語は、当然ながら、続くのだ。(Park 278)

註

(1) アスペルガー症の位置づけには専門家の間でも諸説あり、重度の異なる自閉症の総称である「自閉症スペクトラム障害」の最も軽度な

ものとして位置づける考えもあれば、高機能自閉症とアスペルガー症を区別する場合もある。

(2) 以下、特に注記しない場合は、和訳はすべて拙訳。

(3) 以下、「……」はすべて筆者による省略。

(4) 定型発達におおむね、いくつの子供は周囲の  
現象をハイパーフォーミングとして区分けして、いく能力

を持たない。だから、意識的な想起が可  
能な体験は、物心いつてからのそれに限られ

るのである。

引用文献

Baron-Cohen, Simon. *Mindblindness: An Essay on  
Autism and Theory of Mind*. MIT Press: Cam-  
bridge, 1997.  
Barron, Judy and Sean Barron. *There's a Boy in  
Here*. Arlington: Future Horizons Inc., 2002.  
Bruner, Jerome. *Actual Minds, Possible Worlds*.  
Harvard University Press: New York, 1992.  
———. *Acts of Meaning*. Harvard University  
press: Cambridge, 1990.  
Grandin, Temple. *a Animals in Transition*. Har-  
court Inc.: New York, 2006.  
———. *Emergence: Labeled Autistic*. Warner  
Books: New York, 1986.  
———. *b Thinking in Pictures: My Life with  
Autism*. Vintage: New York, 2006.  
Park, Clara Claiborne. *The Siege: A Family's  
Journey into the World of an Autistic Child*.

Atlantic Monthly Press: Boston, 1967.  
Robison, John Elder. *Look Me in the Eye: My Life  
with Asperger's*. Crown Publishers: New York,  
2007.  
Sacks, Oliver. *The Man Who Mistook His Wife for  
a Hat*. Touchstone: New York, 1970.  
———. *An Anthropologist on Mars*. Vintage: New  
York, 1995.  
Williams, Donna. *Autism and Sensing: The Unlost  
Instinct*. Jessica Kingsley Publishers: London,  
1998.  
———. *Autism: An Inside-Out Approach*. Jessica  
Kingsley Publishers: London, 1996.  
———. *Nobody Nowhere: The Extraordinary  
Autobiography of an Autistic Perennial*. New  
York, 1992.  
———. *Somebody Somewhere: Breaking Free*

*from the World of Autism*. Three Rivers Press:  
New York, 1994.

Young, Kay and Jeffrey L. Saver. "The Neurology  
of Narrative." *SubStance*. Number 94/95, 2001.  
pp. 72-84.

泉流星『地球生まれの異星人 自閉症者との対  
日本に生かす』花風社 二〇〇八年。

タリヤ・ガールマン (ロキ・リノコ語) 『チェン  
「幸福」にならなかつた』花風社 二〇〇〇年。  
ニコル・マンロー (垂水雄二訳) 『喪失と獲得  
進化心理学から見た心と体』紀伊國屋書店 二  
〇〇四年。

野家啓一『物語の哲学』岩波書店 二〇〇七年。  
藤家寛子『おの扉の向うへ 自閉の少女と家族  
成長の物語』花風社 二〇〇五年。  
村上靖彦『自閉症の現象学』勤草書房 二〇〇八  
年。